

# 軍都臣民の精神構造

—近代金沢の象嵌職人を事例として—

青木 秀男

## 主題と構成

近代の日本「国」は、天皇を元首とする軍事国家であった。国民<sup>1)</sup>は、天皇と国家への恭順を強いられ、また積極的に恭順した。それはどのように可能であったのか。その時、国民は、どのような精神構造をもったのか。それは、現代日本に生きる私たちの来し方と行く末に関わる必須の問いである。本稿は、その問いに迫る一つの試みである。本稿は、軍都金沢で明治から昭和を生きた象嵌職人(米澤弘安)が書いた日記(『米澤弘安日記』/以下『日記』<sup>2)</sup>)をテキストに、日本の近代=軍国主義の様態を、一人の臣民の精神構造を介して考察する。この課題を追究するため、本稿は次のような構成をとる。1節で、重要概念である国家について、先行の考察を参照する。2節で、日記と階層・歴史の関わりについて考察する。3節で、『日記』の舞台となる軍都金沢について説明する。4節で、精神構造の分析のための仮説枠組を提示する。以下、枠組を基に『日記』の記述を分析し、解釈する。5節で、精神構造の背景をなす「観念の基盤」について分析する。6節で、精神構造の実現をなす「観念の実践」について分析する。7節で、精神構造の構造をなす「観念の編成」について分析する。8節で、「観念の編成」が胎む揺らぎについて考察する。最後に、結論として一言付加する。

## I 国家とイデオロギー

レーニン、「資本主義の最高の発展段階」としての帝国主義について論じた[レーニン, 1917=57]。それから100年、私たちは、世界丸ごとの帝国主義「グローバル資本主義」の段階にある。帝国主義は軍国主義の母である。今、国家と国家連合は、軍国主義の覇を競っている。私たちはどこへ行くのか。

日本は、西欧列強が植民地獲得を競う帝国主義の段階に、近代国家形成の緒に着いた。西欧列強から主権を守り、覇権を競い、領土を拡大する。これが、国家形成の必須の条件であった<sup>3)</sup>。ゆえにそれは、最初から帝国主義的であった。1867年に成立した明治政府の中で、すぐに征韓論が台頭した。1873年

には太政官が徴兵令を発した。日本の近代化は軍国主義化であった。そして国民は、臣民として形成された。では、このような軍国主義的な国家形成はどのように可能だったのか。国民はどのように形成され、国家はどのように国民を包摂(または排除)したのか。すなわち本稿は、次のような問題意識に連続する。「日本が西欧列強の帝国主義の仲間入りをし、植民地を擁する帝国となったことが、当の国民の側にどのような意識と認識の変化をもたらしたのか、あるいは、帝国の側の国民がそれをどのようにして主体的に自己のものとしていったのか、という意識化のプロセスに踏み込んで『帝国意識』を分析する」[坪田, 2009:85-86]。そのため本稿は、近代を生きた一人の民衆に焦点を当て、その精神構造にみる天皇・国家・家郷について考察する。そこで、最重要の概念・国家に関する基本的な理解が必要になる。

まず、国家の本質についてである。マルクス＝エンゲルスは次のように書いた。「特殊利害と共同利害とのこの矛盾にもとづいて、共同利害は、個別および全体の現実的な利害からきりはなされて国家(傍点は原著者)として一つの独立な姿をとる。そしてそれは同時にまた幻想的な共同体としてである」[マルクス＝エンゲルス, 1845-46:44]。すなわち国家の本質は、「共同性の幻想的形態」であるとした。吉本隆明は、このアイデアを受けて、国家・法・宗教を「共同の幻想である」とした [吉本, 1982:7]<sup>4)</sup>。N・アンダーソンは、「国民(国家-引用者)とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」[Anderson, 1983=91:24] とした。これらの議論から、国家について4つの要件が抽出される。一つ、国家は現実的な利害を基盤とする。この点は、レーニンの国家論と符合する。「国家は、階級対立の非和解性の産物であり、その現われである」[レーニン, 1917:17]。すなわち国家は、階級的利害を全体的利害に変換する装置である。二つ、国家は、現実利害から独立した姿をとる。三つ、国家は、共同性／共同体の姿態をとる。四つ、国家は、想像された構築物／幻想である。ここから、近代の日本「国」は、次のように説明される。日本「国」は、支配階級の利害を隠蔽し、万世一系の天皇が統べる大和民族の共同体として構築された国家である。

次に、国家の機能についてである。すなわち国家は、どのように国民を統治するのか。A・グラムシは次のように書いた。「国家とは指導階級がそれによって自己の支配を正当化し維持するのみならず、被統治者から能動的同意を獲得することを可能とする実践的および理論的活動の総体」[松田, 2003:57] である。国家は、政治社会と市民社会からなる。前者は国民を強制し、後者は国民の同意を創出する。「国家は(被統治者の—引用者)同意を備え、そして同意を要求するが、さらに政治的・組合的な結社によって、こ

の同意を『教育する』こともする」[Gramsci, 1929-47:202]。このアイデアを受けて、L・アルチュセールは次のように書いた。「<国家の抑圧装置>のように、抑圧によって機能するのではない。

諸制度がそれらに対応する諸イデオロギーを『生産する』のではなく、ひとつの<イデオロギー>(<国家のイデオロギー>)の諸要素がそれらに対応する諸制度と諸制度の実践の『なかで現実化される』あるいは『そのなかに存在する』(傍点は原文／Althusser, 1995:143-144)。すなわち、国民を力で支配する暴力装置と、国民の精神を創出するイデオロギー装置である。国家はイデオロギーを創造し、諸制度により国民を教育して、国民を取り込む。その結果、国民は、国家の積極的な信奉者になる。ここから、近代の日本「国」と国民は、次のように説明される。日本「国」は、一方で軍隊・警察の暴力を誇示し、他方で、国民を教育して天皇建国の神話を注入する。その結果、天皇は、国民が畏敬する〈人〉になる。その天皇が国家を統べる。ゆえに国家も、畏敬する存在となる。そのような国家と、現実政治を行う政府としての「国家」とは、イデオロギーとしての国家の次元を異にする。前者は聖なる存在(共同幻想性)であり、後者は俗なる存在(現実利害性)である。弘安は、前者を崇め、後者をしばしば批判した。

## II 階層と歴史

本稿は、米澤弘安の精神構造を分析する。そのために彼が書いた『日記』を用いる。ゆえに、弘安の階層及び『日記』について説明しておく。

### 1 弘安の階層

城下町金沢が近代都市に変る中、伝統工芸職人は階層分化した。その多くは、問屋請けの生活用具職人、工場で働く職工になった。弘安は、作家的職人に止まった。弘安には、象嵌職人の父の名声があり、その顧客がいた。弘安の象嵌技倆が評価された。弘安の作品は、国内外の展覧会に入選した。作品の顧客には、日本・朝鮮の皇族や田藩主の前田家がいた。弘安は、著名な職人や絵師と交流した。このように弘安は、仕事の評価とネットワークの点で、職人階層の上層にあった。

しかし米澤家の家業は、零細な家内工業であった。象嵌仕事は、父親(元気なうち)と弘安と弟でこなした。後に弟が分家して、通い職人になった。母親は、品物を顧客に届けたり、掛取り(売上金の徴収)をした。後に弘安の妻がこれに加わった。顧客の開拓や資金の工面もした。こうして弘安の仕事は、家族に支えられた。それでも米澤家の家計は、一時期を除いて困窮し

た。弘安は、煙管や火箸、鉄瓶、櫛、<sup>かざし</sup>簪等の生活用具の修繕や製作をした。その傍ら工芸作品を制作した。生活用具の修繕・製作の注文は、大正初期・中期に増えた。大正末期には仕事は激減し、昭和にはほとんどなくなった。弘安は、工芸品の材料購入の資金に苦労した。そのため、しばしば裕福な妻の父に資金援助を仰いだ。問屋や同業者に借金をした。家の二階を貸間にした。最後は、妻が裁縫で手間賃を稼いだ。家計の困窮が続く中、弘安は、長男による家業の継承を断念した。

このように弘安は、職人世界において上層、生計において中層または下層にあった。弘安は、資本主義の激動の中で没落する都市旧中間層の一人であった。

## 2 日記と階層

弘安は、1906(明治39)年(19歳)から72(昭和47)年(85歳)までの66年間に、400字詰原稿用紙で4,336枚分の日記を書いた。日記は大学ノートや日記帳に、また新聞広告や紙片に鉛筆やペンで書かれた。筆者らは、弘安の日記を『日記』に復刻したが、インクが褪せて文字が薄い、当て字・誤字・脱字がある、崩し書きがある、省略がある等で、文字の判読は容易ではなかった。『日記』は、ただ自分のために書かれた。明治・大正期には、まだ非識字者が多かった。弘安には、次のような日記を書く条件があった。一つ、読み書き能力があった。弘安は、高等小学校を首席で修了し、その後、帝国中学会(通信教育)に入った。そのため弘安の語彙力、表現力は豊かであった。二つ、文字を書くことのバリアが低かった。弘安は新聞を購読した。図書館へ通った。弘安は、文字を読み書くことに親しんだ。三つ、日記を書く生活の条件があった。弘安は居職<sup>いじよく</sup>の職人で、いつも自宅で仕事をした。ゆえに、時間の自己管理が可能で、生活のリズムは規則的であった。日記を書くことも、生活のリズムの内であった。四つ、日記を書く動機があった。弘安の生活態度は、禁欲的で規律的であった。その反省的態度が、日記を必要とした。また日記は、生活の覚え帳としてあった。こうして弘安は、日記を書く外的・内的条件を合わせ持った。明治・大正期に日記を書いたのは、多くは権力層・知識人・商人・地域上層等であった。大方の民衆には、日記を書く条件がなかった。弘安は、上層の豊かな民衆ではなく、また、極端に窮乏した下層民でもなかった。その意味で弘安は、日記階層と非日記階層の境界域にあった。

## 3 日記と歴史



『日記』は、次のような内容からなった。①人間関係(家族・親族、仕事仲間・顧客、近隣、友人)、②生活場面(仕事の進捗、寺社の参拝、趣味と遊び)、③生活の出来事(結婚、離婚、出産、相続、住居、病気、死亡)、④社会の出来事(天皇・皇族、政治・軍事、経済、事故、災害)。もっとも多いのは、家業に関する記述である。社会の出来事は、多くは新聞記事が転記された。年頭には、旧年の反省と新年の抱負が書かれた。しかし普段は、一日の出来事が淡々と書かれた。『日記』は、次のような流れをとった。はじめに月日、曜日、天候、気温、起床・就寝時間が書かれた。次に、その日の出来事が、だれが、何時頃、何をしたという具合に書かれた。最後に、文の頭に◎印が付されて、社会の出来事が書かれた。本稿がテキストにするのは、『日記』のこの部分である。

本稿の主題は、『日記』の天皇と国家に関わる記述から弘安の精神構造を読み取ることにある。そこに、(日記を記述する)「個人と歴史」の問題が生起する。日記は3つの次元で歴史に関わる。①日記に記録される歴史——これは、日記に書かれた歴史的事件である。書き手は、歴史的事件に直接関わろうと関わるまいと、それを書くことで、個人史を歴史に練り込む。歴史的事件は、時には個人史を直接に把握する。その時、個人は、歴史的事件が与える衝撃を避けることはできない。そして、歴史との対峙をよぎなくされる。歴史的事件は、個人史を転轍する。②日記に表現される歴史——日記は、個人の感受・思考・行為を介して、歴史を表現する。それは、個人の感受・思考・行為に表現される歴史である。そこには、歴史に把握された個人がいる。個人は、歴史が論すまま感じ、思い、行為する。日記は、そのような個人の歴史の実践を記録する。③日記に解説される時代——これは、日記の読み手が、書かれた行為や出来事の背後に解説する歴史である。人間の行為は、その基底において、感受と思考の型としての、歴史の〈集合心性〉に貫かれている。それは、感受と思考の深層、つまり無意識に潜む歴史、いわば〈歴史の意味的表象〉である。日記の読み手は、この次元において、書き手の、一見歴史と無縁な行為や出来事の記述の中に、歴史の心性を解説する。・・・本稿は、これら3つの次元を視野に、『日記』の分析と解説を行う。

### Ⅲ 軍都金沢

近代金沢は軍都、すなわち軍隊の都市であった。旧金沢城内に第九師団が置かれ(明治31/1898年)、市内に旅団・連隊・大隊が配置された。第九師団は、北陸3県出身の兵士で構成され、歩兵第六旅団(歩兵第七連隊、歩兵三十五連隊)、騎兵第九連隊、野戦砲兵第九連隊、工兵第九大隊、輜重兵第

九大隊が帰属した(この他、敦賀の歩兵十九連隊と鯖江の歩兵三十六連隊からなる歩兵第十八旅団が帰属した) [橋本・林, 1987:95]。また(旧) 郊外には、出羽町練兵場、野村練兵場が設けられ、さらに衛戍監獄及び衛戍病院等の軍関連施設が設けられた。こうして、『設備万端』は明治三十一年末までに(ほぼ一引用者) 完成し(金沢市史編さん委員会2006:162)、金沢は、日本有数の軍事的拠点となった。第九師団は、『日記』が書かれた時代の明治後期～昭和初期には、日露戦争の旅順攻囲戦(明治37-38/1904-05年)、奉天会戦(明治38/1905年)、シベリア出兵(大正10/1921年)、第一次上海事変(昭和7/1932年)に参戦した。第九師団は最強師団として名を馳せたが、いずれも激戦地への出兵で、戦場で死傷した兵士が多かった。金沢が軍都になるとともに、都市インフラが整備された。兵士・軍用物資の輸送に必要な鉄道や幹線道路、橋梁が建設された [金沢市史編さん委員会, 2006:163-165]。コレラなどの伝染病の予防のために下水溝・便所・井戸・飲料水・汚穢物等の掃除・改良・除去や伝染病等病人への対応を行う衛生行政が行われた [金沢市史編さん委員会, 2006:175]。

第九師団の戦闘員は「一万人である。平時にどれほどの兵員が金澤にいたのか確定するのはむずかしいが、師団関係者・家族をふくめておおよそ同程度ではなかったかと思われる。それでも当時の金沢の人口の約一割にあたる」 [橋本・林, 1987:95]。その経済効果は大きかった。「軍隊は最大の消費人口」 [金沢市史編さん委員会, 2006:166] であった。それには、兵士が利用した遊郭・料亭、商店街の店や鑑札を与えられた師団出入りの商人(地図、写真、衣類、テント、旗、食料、菓子等)、さらに上級兵士の家族が利用する日用品や食料の店等があった。街路にはいつも兵士がいた。軍隊は、毎年、四方拝、陸軍始、紀元節、天長節、軍旗祭、明治節、招魂祭等の行事を行った。これらの日には隊内の閲兵式や式典・祭典、軍隊行進等が行われた。軍隊の移動(戦地へ出る、帰還する)や上級兵士の着任や離任では、軍隊行進が行われ、金沢駅では歓送迎の式典が行われた。このように市民は、兵士を顧客とし、兵士を送迎し、軍隊行進を見、軍隊の催しに参加した。軍隊の存在は、金沢市の政治・経済、市民の日常生活を深く捉えた<sup>5)</sup>。

#### Ⅳ 臣民の精神構造

本稿は、日本の近代＝軍国主義の様態を、民衆の目を通して、すなわち、一人の臣民の精神構造を介して考察する。ここで臣民とは、一般に君主の支配に服する民をいうが、日本では大日本帝国憲法18条に現れる語に発し、その含意は、天皇への絶対服従を規範とする皇族以外の国民を指す。臣民に

は、天皇が統べる皇国日本の民という自覚が喚起された。次に精神構造とは、丸山眞男の語に発するが〔丸山, 1951:67〕、ここでは社会意識の全体、すなわち、社会観念の編成からなるイデオロギー、信念体系から心理や無意識に及ぶ人間精神の全体を指すものとする。筆者の関心は、日本人の精神構造の分析にあり、先に兵士の精神構造を分析したが〔青木, 2008:2011〕、本稿はその研究の系譜にある。権力の地位にあって国づくりを進める人々ではなく、その対象となる人々すなわち民衆が、どのようにして臣民になったのか。その精神構造はどのようなものだったのか。本稿の関心はここにある。

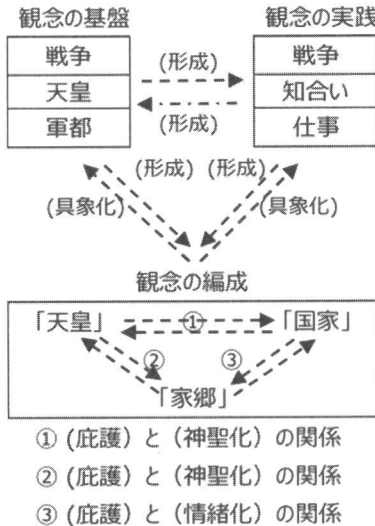
臣民の精神構造の分析に入る前に、分析の射程について2点断わっておく。一つ、本稿は、金沢の職人弘安の精神構造を分析する。ではこの事例は、臣民の精神構造のどこに位置づくのか。弘安が軍都で生きたという事実は、どれほどに精神構造の形成に影響したのか。本稿に、それを直接検証する余裕はない。本稿は、弘安の精神構造を臣民の多様な精神構造の一つの典型となす。精神の典型とは、時代の人間の特徴をもっとも鮮明に備えた精神の様態をいう。ゆえにそれは、もっとも個性的かつ一般的な精神を指す。弘安の精神構造に、弘安固有の部分と弘安に重なる無数の人びとの精神構造を同時にみる。

二つ、『日記』では、弘安が精神構造を形成した過程の考察は十分に行えない。本稿は、構造の考察が中心になる。『日記』初期の若い頃、弘安は、戦地から凱旋する軍隊を眩しく眺めた。そして軍隊の勇壮さが強調された。入営して自殺する兵士がいたが、弘安は彼らを軽蔑した。すなわち弘安は、愛国心に燃える若者であった。他方で、政治や国民の苦難への関心は、強くなかった。しかし歳を経るにつれ、軍隊の記述は、(全体として)淡々としたものになった。逆に、政治や国民の苦難への関心が強くなった。『日記』に読める弘安の変化とは、この程度である。それよりも『日記』では、弘安の天皇・国家に対する不変の態度が際立つ。すなわち、弘安の天皇・国家に関する信念の骨格は、すでに若い頃にできていた。天皇中心の教育勅語が発表されたのは、明治23(1890)年である。弘安は、明治35(1902)年に高等小学校を首席で卒業した。弘安は、優等生として天皇を庇護者とする国家観を率先して学んだと思われる。そして軍都に育った弘安は、それを日常生活の中で日々実践したと思われる。すなわち、精神構造は、確立された構造でありつつ、それらの実践を通して日々形成されたともいえる。

精神構造の分析は、『日記』に読める重要な語やフレーズを抽出し、それらを本稿の主題に沿って整理し、意味をたがいに関連させ、論理の道筋をつけ、最後に、それらを時代と社会の脈絡に位置づけるかたちで行われた。そ

して精神構造は、3つの重要概念(「国家」「天皇」「家郷」)の編成として描かれた。さらに精神構造に関して、『日記』の記述は3つの分析場面から構成された。図を見られたい。一つ、その精神構造を形成した時代・社会背景、すなわち「社会観念の基盤」である。ここでの問いは次のようになる。どのような時代と社会が、弘安の精神構造を育んだのか。二つ、生活における「社会観念の実践」である。すなわち弘安は、行為を通してどのように社会観念を実践したのか。また行為は、どのように精神構造を育んだのか。三つ、精神構造としての「社会観念の編成」である。すなわち弘安は、どのような精神構造をもったのか。精神構造は、時代・社会の産物であり、個人の行為の産物である。同時に個人は、精神構造に導かれて行為を行い、行為は(ときには)時代・社会に影響し、またそれを転軸する。

図 精神構造の形成と具象化



これらの考察は、最後に2つの問題へ連動する。一つ、軍都金沢の職人という臣民の精神構造は、兵士のそれとどのように対照されるのか。それは、日本人の精神構造のどこに位置づくのか。二つ、戦後、臣民は消えた。天皇は人間になり、平和と民主主義の世になった。社会観念の基盤・実践・中身も変容した。しかし、日本人の精神構造の型式はどれほど変容したのか。否、していない。それこそ、敗戦直後に丸山が嘆いた現実であった。これら2つの問題は、筆者の精神構造研究の究極の関心である。本稿は、その解を模索するための一里程である。

## V 観念の基盤

弘安の精神構造について考察する前に、それが育まれた時代・社会背景を「観念の基盤」として整理する。弘安は、どのような時代と社会を生きたのか。観念の基盤として『日記』に頻出し、また重要な意味をなす語は、「戦争」「天皇」「軍都」であった。以下、それらに関わるおもな記述を、『日記』から抜粋する。

### 1 軍都

軍隊は、市民の生活の細部に入り込んだ。「煙火ノ音ニ目覚テ、耳ヲスマセバ微ニ聞ユル音楽ノ調べ 次デ起ル歡呼ノ聲、時ニ時計ハ五点ヲ打ツ」[M39.1.20]<sup>6)</sup>。兵営から聞こえる煙火の音、号砲、歡声、軍歌、小銃の音が、弘安の眠りを覚ました。弘安の家は、師団本部から離れていなかった。そうでなくとも、号砲は金沢の街に響き渡った。市民は、戦地に赴く／帰還する兵士を送迎した。「母ハ朝三時ノ凱旋軍隊ヲ迎ヘテ家ニ帰テ我等ハ起テ雪ヲ除ケ、七時六分ノ凱旋軍隊ヲ迎フ・・・晝飯後供ニ凱旋軍隊ヲ迎フ」[M39.1.14]。新兵の入営日や除隊日は、息子や弟を送迎する親族も加わり、街中が賑わった。「本日除隊せし兵と明朝入営する壮丁ニテ市中ハ頗賑合ふ」[T4.11.28]。軍隊の演習や模擬戦を見学した。「大演習 犀川浅の川へ午后行き高柳迄行く 夕帰る」[T13.11.2]。軍隊の催しを観覧した。「今日ハ七聯隊の軍旗祭にて昼休ニ清二(弟)と喜代子(娘)を抱きて見物ニ行く」[T9.9.5]。「陸軍記念日にて・・・軍隊、青訓所、学生、少年團等の分列式舉行にて、僕も三人の子供を連れて見ニ行く・・・頗る見事であつた」[S4.3.10]。このように軍都の市民は、軍隊と頻りに接した。また金沢には1万人の兵士がいた。兵士の遊興(遊郭、飲食店)や生活用品の消費で、商業が潤った。市民にとって軍隊は、必要な存在であった。市民は、軍隊と戦争を「自然に」受け入れた。弘安は、軍隊で膨張する金沢を誇らしく思った。「金澤は、年々膨張しつゝあり 大に勇躍して、名に實に、北國の大都たれ」[M41.2.26]。

### 2 戦争

『日記』の記述の中心は、明治後期～昭和初期である。それは戦争の時代であった。『日記』には、日露戦争、第一次世界大戦、シベリア出兵、日本軍と中国軍の衝突(日中戦争の前)が登場する。弘安は、戦争に関わる出来事を丹念に書いた。戦争は弘安を深く捉えた。戦争に勝てば、平和が守られる。「日露戦争終りをつげ、光榮なる平和の新年を向ひたる」[M39.1.1]。そして

生活が安泰となる。ゆえに、戦争は勝たなければならない。弘安は、戦争の進行に一喜一憂した。弘安は、街を行進する軍隊を頼もしく眺めた。「新第九師團長松浦將軍午前九時十六分金沢驛着 十三発の礼砲の発射あり 木ノ新保ハ七聯隊、市姫通三十五聯隊、大手町工兵、輜重兵、砲兵等の整列して向ふ 甚右エ門坂より師團司令部ニ入る・・・頗る勇ましかりき」[T8.7.29]。弘安は、行進する軍隊に万歳を叫んだ。「今シモ凱旋セル架橋從列ハ、彼方ヨリ肅々来り・・・余ハ萬歳ヲ叫ブ 本部ノ将校ハ舉手セラル」[M39.1.26]。「夕食後、父を留守ニ四人にて官民合同の大提灯行列を見ニ行く」[T3.11.9]。これは、第一次世界大戦で青島が陥落した時である。戦争に勝つと提灯行列が出た。

戦争は〈他者〉との戦いである。戦争は民族主義と一体である。戦争は、敵国(人)を加害者に仕立て、〈われ〉を被害者とみなす。弘安も〈われ〉の一人であった。「如斯く度々の侮辱、帝國の威嚴を傷く 今ニ於テ彼を解決せずんば益々増長せん 此際強硬手段ニ出づ可き必要を認す」[T2.9.6]。これは、中国の兵士が日本人の民間人を殺害し、家財を略奪し、日本兵士を捕えて侮辱を加えたという報道に、弘安が怒った場面である。弘安は、中国軍の増長を戒めるために、軍事行動を取るべきだと書いている。

報道の真偽は確認されていない。しかし弘安には、それはどうでもよかったと思われる。

### 3 天皇

明治初期、政府は民衆に天皇の存在を教え、天皇に対する畏敬の念をもたせるのに苦勞した。帝国主義の時代にあつて、日本は主権と領土を護るため、民族意識を必要とした。そのため国家誕生の神話を創造した。そして主権を天皇へ人格化した。日本が朝鮮半島へ軍を進め、日清・日露戦争を経る中で、民衆に天皇への畏敬の念が浸透していった。そこで、明治天皇の役割が大きかった。弘安が『日記』を書き始めたのは、明治39年の19歳の時である。弘安は、すでに熱い天皇崇拜者であった。

弘安が天皇についてとくに多くを書いたのは、明治天皇が死んだ時である。弘安は、『日記』に明治天皇の病気について詳細に書いた [M45.7.30]。そして悲しんだ。「日頃無類ノ御壯健ニテましましける先帝陛下ガ僅カニ十餘日ノ御惱ニシテ遂ニ崩御相成シハ実ニ夢ニ夢見ル心地シテ、六千万ノ臣民ガ皆無限ノ遺憾ニ存シ奉ル所ナルガ」[M45.7.30]。『日記』に、明治天皇の死を悼む奉悼式、大喪儀、弔祭会、遥拝式、百日祭等が書かれた。市が設けた遥拝場に、弘安は、父、弟とともに「禮装ニテ行ク」[M45.9.13]。家に帰り

「(父と)母ト二人ニテ御尊影前ニテ御詠歌ヲ上ケラレタレバ、僕モ共ニ上ケリ」[同]。大正天皇の着任と大正末年の死がこれに続く。「天皇陛下朝見式 大正元年七月三十一日午前十時ヲ以テ、踐祚後ノ朝見式ヲ行ハセラレタリ」[M45.8.1]。「天皇陛下には、大正十五年十二月二十五日午前一時二十五分、葉山御用邸ニ於て崩御あらせらる」[T15.12.25]。さらに『日記』に、紀元節、神武天皇祭、天長節、新嘗祭、春季・秋季皇霊祭、御大典奉祝、歌会始、朝見式等、天皇に関わる旗日や行事が丹念に書かれた。また、皇太子殿下や東宮殿下、閑院宮殿下の行啓や参拝等が書かれた。

## VI 観念の実践

弘安は、「観念の基盤」を背景に、どのようにそれらの観念を実践したのか。弘安の「観念の実践」は、時代・社会に制約され、また、時代・社会を形成する微分子的な要因をなす。他方で、観念の実践は、弘安のイデオロギーや信念体系の「観念の編成」の具象化としてある。また、観念の編成を直接に支え、強化し、変更する。観念の実践として『日記』に頻出し、重要な意味をなす語は、「戦争」「知合い」「仕事」であった。以下、それらに関わるおもな事柄の記述を、『日記』から抜粋する。

### 1 戦争

軍都に住む弘安は、軍隊・軍人に関わってさまざまな行為をした。それには次のような行為があった。

①送迎——軍隊が戦地へ向かう、戦地から帰還する、演習などで移動する、高級兵士が連隊を退任する、連隊に赴任する。これらの度に軍隊が市中を行進し、車場に整列する。市民は、その軍隊や兵士を送迎した。『日記』にその様子が頻出する。「母ハ朝三時ノ凱旋軍隊ヲ迎ヘテ家ニ帰テ我等ハ起テ雪ヲ除ケ、七時六分ノ凱旋軍隊ヲ迎フ 此日荒木純一來ル 次ニ藤掛嘉作様(弘安の叔父)御出ニ相成、晝飯後供ニ凱旋軍隊ヲ迎フ」[M39.1.14]。日露戦争で戦地から凱旋する軍隊のために道路の雪除けをして迎える。「七聯隊の朝鮮より帰るのを父は停車場へ見ニ行かれた。僕等も昼飯後停車場へ行く」[T3.11.7]。「三十五聯隊本部午後零時半凱旋せまり 堤町へ喜代子を負って、清二も共ニ歓迎ニ行く」[T11.9.29]。

②見学——弘安は、軍隊が行う演習や儀式、行事等を見学した。「四時頃煙火ヲ打上ケタルヲ以テ、(戦地から凱旋する軍隊を)白銀町ニ行キテ見ル」[M39.2.17]、「七聯隊ノ本丸ニ上リテ号砲ヲ打ツヲ見ル」[M45.5.6]、「七聯隊の軍旗祭にて昼休ニ見ニ行く」[T5.9.9]、「出羽町練兵場ニ於て牛馬共進會開

催さる。折柄天氣よかりしより午后清二(弘安の弟)と面物に行く」[T9.10.3]、  
「大演習 犀川浅の川へ午後行き高柳迄行く 夕帰る」[T13.11.6]。「金石(金澤郊外の港)へ霧嶋金剛の軍艦を見物に行く」[T14.3.10]。

③提灯行列——戦地で戦闘に勝つと、提灯行列が行われた。弘安は、提灯行列を見学し、参加し、提灯行列を準備した。「(青嶋)陥落祝の提灯行列は今夜も出た・・・僕も堤町迄行き、中嶋町、五寶町、四高校、傳馬町、泉町、川上等の行列を見た 百鬼夜行の出立なり」[T3.11.10]、「午後、子供を連れ太鼓行列二行って呉れと頼まれ、羽織袴で辰巳君と出掛けた」[T4.11.7]、「會議は勿論提灯行列の問題なり 遂ニ話・・・五ヶ町合同にて催す事、大行燈、大砲等を造る事ニ決す 提灯は中小へ問ふ合せし處、幸ニありて百五十注文せり 後より小幡ニ造りし旗行燈五十及外二十個の提灯も用せり 吾々は其受持ニ活動する事となり、僕と辰巳君は三番丁及二番丁をふれ廻す」[T3.11.13]。

## 2 知合い

①軍隊——弘安は、軍隊の行進や入營、除隊において多くの知合いを送迎し、手伝った。それらの個人的な軍隊関与は、弘安の精神構造に強く影響したと思われる。「十一時半ヨリ軍隊ヲ迎フベク家ヲ出デ、停車場ニ行ク 十二時頃列車ハ着ク 此凱旋軍隊ハ第一野戦病院ト砲兵ナリ 野戦病院中、小森庄作君アリ」[M39.1.20]。次に入營である。「入營日なり 高桑宗一君ハ騎兵隊 水辺辰雄君ハ一年志願兵ニテ砲兵隊へ入營にて七時十五分前起き急いで堅町水邊方へ行くと九時迄ニ入れはよいとて酒など出て居た」[T5.12.1]、「辰巳才一郎君ハ本日補充兵として三ヶ月間工兵隊へ入營する事とて、朝六時前より見送人が来て居らる」[T6.4.1]、「橋本友治君、近衛兵ニ入隊の為本日午後七時五分の列車ニ出発にて、僕は停車場へ見送ニ行く」[T7.11.25]。次に除隊である。「高桑宗一君が今日除隊すると云ふから朝食を早くして出た積りであつたか途中で除隊兵ニ、多く来るのニ逢ふ」[T8.11.20]、「川岸ノ上野憲俊君モ輜重隊ヨリ除隊スルノデ、清二ハ起ルト直グ友ガ呼ビニ来タカラ行ツタ 僕モ冷水浴早々迎ニ行クヤウニ出タ時ニ七時 師團迄行カネバナラヌ上、遅イト思フノデ大急ギ家ヲ出ル」[T5.11.20]、「中野様、午後七時五分發にて東京へ行かる 子息様除隊出迎旁見物しに行かれるのだと日暮てつき姉来られ、母と清二と共ニ停車場へ見送ニ行く」[T.7.11.19]。最後に、弘安の弟(清二)が軍隊に呼び出された。「清二は本日點呼にて午前七時半迄ニ七聯隊へ行かねばならぬ由 未教育兵にて本年始めての點呼なり」[T9.8.2]。それは、身近な肉親の軍隊体験であった。



②朝鮮——『日記』には、朝鮮へ移住した親族との手紙のやりとりの記述が頻出する。警察関係の仕事をしていた藤掛嘉作（弘安の母方の叔父）とその家族、高桑宗一（弘安の母方の従弟）、横地雅一（同）等である。「藤掛嘉作様、今度朝鮮へ行クトテ北海道ヲ辞シテ、本日午後三時頃ノ汽車ニテ来澤トノ事」[M44.2.22]、「藤掛嘉作様よりはがき来ル 京城へ轉任の案内と見舞なり」[M45.11.30]、「朝鮮ノ高桑宗一ヨリハガキニテ時節見舞ガ来タ」[45.4.24]、「朝鮮高桑宗一君よりは可き来る」[T5.3.24]、「横地君午前八時十八分ノ列車ニテ、朝鮮龍山ノ郵便局へ任務スル筈ニテ、出發スヲ見送ニ行キシ」[M43.12.12]、「横地君より朝鮮人の争闘の圖の繪葉書が来た」[M45.11.3]。朝鮮から金沢へ帰った時は、朝鮮の話聞いた。「午後五時頃嘉作様嘉子さんを連れて御出あり 後より外喜様正子を連れて来られ廉肴廉酒を出す 朝鮮の話やら何やらかやらして八時半帰られた」[T5.8.9]。これらの体験は、弘安の朝鮮観に大きく影響したと思われる。朝鮮で暴動（三・一独立運動）が起きた時、叔父の嘉作は、暴動弾圧の様子を弘安に伝えた。「藤掛嘉作様より御手紙来る・・・朝鮮今回の暴動にて入獄せしもの八千ニ及び公州監獄でさえ四百名も入り大多忙なりと」[T8.5.24]。

### 3 仕事

弘安は、時どき仕事で皇族と関わりをもった。「午後花瓶の繪ヲ付ケタコノ花瓶ハ本年皇太子殿下行啓ニ付縣廳ヨリノ注文ニテ陳列シテ、殿下ニ御覽ニ入レル品ニテ高サ一尺一寸、桐ノ圖ヲ付ケ□□ガ首ノ所ヘツクノダ」[M42.1.1]、「縣廳の商工水産課長鈴川様より、廿三日午前十時出頭して呉れとの手紙か来て居たので、何の事かと思ひながら行くと・・・今秋、東宮殿下の御成婚ニ付縣より書棚を献上する事ニ内定されしニ付、各自分擔して十月迄ニ仕上げて呉れよとの御依頼であった・・・(職人)一同承諾の意を表して、しりぞく」[T12.7.23]、「御大典奉祝本縣献上品ノ件ニ付、本日陳列所へ參集の案内あり、午後一時行く・・・関係人数三十二名、綜合製作ハ困難なるものにて調和がうまく行くかとの心配あり、中々仕上迄は心配ものなり 僕には三寸八分丸の鶏頭花の圖があたった」[S3.7.5]。これらの体験は、弘安の天皇・皇族に対する親近感と畏敬の念を培ったと思われる。

## VII 観念の編成

「観念の基盤」に支えられ、それが「観念の実践」により具象化される「観念の編成」、すなわち、弘安の精神の構造はどうだったのか。『日記』において、「観念の編成」を構成する重要な語は、「天皇」「国家」「家郷」であった。前掲

の図をみられたい。

弘安は「忠節の共同体」に生きた。忠節の対象は、「国家」と「天皇」であった。国家は、弘安の生活の根拠であり、身と心が寄せる防壁であった。国家があるから平和な生活がある。国家は民族である。国家があるから民族の一員である。次に天皇は、国家の人格的な主体であり、庇護者である。天皇が国家を統べる。戦争に負ければ、国家が蹂躪される。国家が蹂躪されれば、平和がなくなる。平和がなければ、家郷と家族が壊される。ゆえに国家は、護られなければならない。そのために臣民は、天皇の意思を喜んで拝受しなければならない。ここで、国家と天皇は神聖化される。

次に、国家は祖国である。祖国の中心には「家郷」がある。ここで国家は、「情緒化」されて家郷になる。家郷は、〈私〉が生まれ、死んで〈私〉の魂が還る懐である。その家郷の中心に家族がある。家族は、〈私〉の揺り籠であり、避難所であり、死後の安息所である。最愛の人々がそこにいる。〈私〉の生は、家族とともにあり、家族に護られ、家族を護る。ここで「家族を護る」には2つの意味がある。まず、国家が戦争に負けて、家郷が蹂躪されれば、家族が酷い目にあう。ゆえに戦争は、勝たなければならない。そのため臣民は、闘わなければならない。次に、〈私〉が国家の意思に背くことは、国家を統べる天皇の意思に背くことである。その結果、家族が「非国民」として酷い目にあう。家族は、国家に人質に取られている。ゆえに、国家と天皇の意思への恭順は不可避である。・・・こうして「天皇」「国家」「家郷」は、〈忠節の共同体〉を三つの軸として、臣民の精神構造の骨格を型どる。

## 1 天皇

①畏敬——弘安は、天皇（と皇族）を畏敬した。弘安は、『日記』を書き始めた19歳の時、すでにその信条は（ほぼ）完成していた。「けふハ、天子ノ生れましし其の日ぞ けふは芽出度天長節也 上戸には菊酒ノ候、下戸には菊餅モ候、祝はずでやは！」[M39.2.17]。明治・大正・昭和にかけて、弘安の天皇への畏敬の念は揺るがなかった。畏敬の念は、時代の天皇規範に沿って書かれた。「今日ハ紀元ノ佳節ニシテ、皇祖國礎ヲ榿原ニ定メ給ヒテヨリ百二十一代二千五百七十餘年皇統連綿トシテ天壤ニ窮マリナク」[M44.2.11]。畏敬の念がもっとも強く表現されたのは、明治天皇が死んだ時である。「日頃無類ノ御壯健ニテましましける先帝陛下ガ僅カニ十餘日ノ御惱ニシテ遂ニ崩御相成シハ実ニ夢ニ夢見ル心地シテ、六千万ノ臣民ガ皆無限ノ遺憾ニ存シ奉ル所ナル」[M45.7.30]、「嗚呼、昨年の今月今日は國民一同は、死して尚忘れ能はさる深恨ニ遭へり 回顧すれば先帝陛下の崩御ましませしより早一

周星、実ニ早き月日の陰の早御一周年祭の當日となつたのである」[T2.7.30]。明治天皇の死を悼む言葉は、大正天皇の即位後も続く。「我が大君の第一年と思へば嬉しきが、又先帝の御遺徳を考ふる時は何となく神上らせ給ひし事の痛わしく、さみしき感ず 市内は、門松、飾縄なく、年賀廻禮の人一人もなければ静かなることかな」[T2.1.1]。「巾旗ハ家毎ニ掲げ、晴たれど風寒く、哀みの色充つ」[T3.4.12]。天皇への畏敬の念は、乃木大将夫妻の殉死の報によりさらに高まった。「昨十三日、御霊輜宮城御発引ノ時、即チ午後八時頃赤阪新坂町ナル自邸ノ奥ノ間ニ於テ鋭利ナル日本刀ヲ以テ咽喉ヲ搔切り同夫人しづ子ハ短刀ヲ以テ心臟ヲ突き通シ夫妻トモ見事ナル殉死ヲ遂ゲタリ・・・思ハズ涙出タリ」[M45.9.14]。

②身体化——天皇への畏敬の念は、時代の言葉により書かれたが、建前ではなかった。弘安は、天皇を心から受け入れ、身体之感覚と動作の一部にしていた。「(明治天皇崩御の一周忌の遥拝式の日) 各戸には喪旗の翻る様を見れば今更に新愁の涙湧きけり 夜、父、清二僕の三人公園へ拝禮ニ行く・・・(式場の) 入口で手を清み拝殿にて草履をはき玉串を捧げて参拝し静ニ下り帰れり」[T2.7.30]。「午後三時三十分、号砲轟く 彼方此方ニハ陛下の御影前にて萬歳の聲上ル 宅ニハ父を始め一同階上の陛下の御影前にて万歳を三唱した」[T4.11.10]。弘安は、天皇に関わる祝日に、天皇の写真に日々の平和を感謝して参拝し、万歳をした。それは、弘安の生活の節目をなした。「毎年年初めニ思ふ事、一年の終りに顧れば其数分の一にも達せられない事を思ひば心元なきか やれるだけはやって見よう 床には今上陛下の筆にて力行不惑と書いた掛物が掛られてある これだ」[T4.1.1]。天皇の言葉は、弘安の心の隙間を満たした。

③慈悲——弘安にとって、天皇は大御心おおみこころもつ慈悲深い「人」であった。その慈悲に、臣民には及ばない天皇の深い懐をみた。「減刑ノ恩命 至尊ノ御思召ニヨリ、無政府主義者中死刑囚十二名ノ死一等ヲ減ズベキ恩命ヲ下シ賜ハル 逆徒ハ感泣ス」[M44.1.21]。新聞は、このように報じた。天皇は、みずからの暗殺を謀った無政府主義者でさえ命を救い、その慈悲に無政府主義者は涙したとある。その記事を読んだ弘安も感動した。弘安は、鉅毒問題で天皇に直訴した田中正造の死を悼んだ。「一代の義人 鉅毒問題を提げて帝國議會ニ御々吼をなし 析鑿の名一時天下に重き處なしたる一代の義人田中正造翁は重患ニ犯され療養中の處四日午后零時五十分に至り・・・遂に逝去せるは悼むべし・・・嗚呼明治の宗吾逝く」[T2.9.6]。その記述には、国民の苦難を憂い、それを救うのは明治天皇だけだったという、弘安の思いがあった。「現ニ青嶋ニ在る交國戦の非交戦者及中立國人にして、攻城より生

ずる損害を避んと欲する者を救助せんとする・・・日本皇帝陛下の至仁至慈なる聖旨を閣下に通告するの光栄を有す」[T3.10.13]。天皇は、戦争においても慈悲深い存在であった。それゆえ、日本の戦争は正しい戦争であった。

## 2 国家

明治後期～昭和初期は、戦争の時代であった。弘安は思った。戦争は国家の命運を決める。

①賛美——弘安は国家を賛美した。日本は、戦争により軍事的な勢力を広げていた。「日露戦争終りをつげ、光栄なる平和の新年を向ひたる 元旦は、門ニ戸ニ松飾いやが上ニ常磐の色濃く、新藁の注連ハ神代以来皇國の古き語り 日章旗ハ軒頭高く翻れり」[M39.1.1]、「今日ハ紀元節デアル 又憲法發布二十周年目デアル 国旗ハ門ニ翻メク 號砲ニ續テ百一発ノ祝砲ハ全市ニ轟イタ」[M42.2.11]。これらの記述に、弘安の、神々しい国家への感情の高ぶりをみる。弘安は、第一次世界大戦で困苦する西欧諸国と比べて、平和で発展する日本を幸運に思った。「惟みるニ歐州の天地は三年有半の久しきに互り禍亂を結びて解けず、多大の人命と財産を損じ、人民困苦云ふべからず 翻つて我國を見れば、國運隆盛にして皇恩愈々厚く、安穩に生活し得るは誠ニ喜ばさるべからず」[T7.1.1]、「歐州戦乱も終結して平和の新年を迎ふる事となつた 我日本は幸にも幸福の位置ニ立つて戦争のお陰で産業、貿易の発展を來たした」[T8.1.1]。「余ハ萬歳ヲ叫ブ 本部ノ將校ハ舉手セラル」[M39.1.26]。弘安は、戦地から凱旋する軍隊を祝福した。「青島陥落祝として本日正午全市鳴を催との事、鳴物を用意して十二時を待つ 午砲を相凶ニ一声ニたゝき出した 半鐘、太鼓、金たらい、石油罐等耳を聳する計り 宅でも皆で石油罐をたゝき萬歳を唱ふ」[T3.11.9]。

②誇り——弘安は、国家とその軍隊を誇らしく思った。弘安は、軍に入隊する新兵を頼もしく思った。「新兵入営ニ付甚右エ門坂下ニ至り見ル 数多ノ旗ヲ立テ萬歳ノ声勇マシク入営ス 実ニ心地ヨシ 旭日ノ輝キ一入勇ヲ添ユ」[M43.12.1]、「旗ハ朝風ニ翻リテ勇マシク、各入営者ハ萬歳ノ聲ニ送り込マレル」[M44.12.1]。その誇りは、もう一つの負の感情とともにあった。「四時頃煙火ヲ打上ケタルヲ以テ、白銀町ニ行キテ見ルニ、我同胞ノ武運ツタナク、敵國ノ俘虜ノ第九師團ニ属スル歩兵少尉津田留次郎氏外下士卒九十三名ノ帰還スル處ナリ 顔青サメ」[M39.2.17]。弘安は、捕虜となった兵士の屈辱を見逃さなかった。「新兵の自殺早や三、四人を出す 死ぬと思は、どんな苦勞にも堪へらるゝ筈、去とては腑甲斐なし」[M41.2.2]。弘安の視線は、国家そのものであった。「如斯く度々の侮辱、帝國の威嚴を傷く 今ニ

於テ彼を解決せずんば益々増長せん 此際強硬手段ニ出づ可き必要を認す」[T2.9.6]。中国の兵士により虐殺・強姦・家財強奪の害を受け、日本の兵士が辱めを受けたと報じられた。それに対して国民の被害感情が高まった。弘安も憤った一人であった。

③優越感——近代日本は、アジアへの優越感を育んだ。それは民族主義を煽った。そして戦争の中で肥大した。弘安も、アジアへの優越感を抱いた。「朝鮮ハ領土トナル 大ニ祝スベキナリ」[M44.2.11]。弘安は、日本の朝鮮併合(植民地化)を喜んだ。「支那、朝鮮は豚、雉ニたとへて各、猛獸カ支那ニ手を出しするを云い、今回の歐州戦争は猛獸のかみ合にて、其内ニ於て日本は支那豚を料理せねばならぬ」[T4.3.22]。これは新聞社の編集主筆の演説である。この演説に弘安は、「感服した 今までの聞いた中で一番ニうまい演説と思ふ」[同]と書いた。「朝鮮今回の暴動にて入獄せしもの八千ニ及び公州監獄でさえ四百名も入り大多忙なりと」[T8.5.24]。弘安の関心は、独立運動弾圧の過酷さよりも弾圧する側にいた叔父の忙しさにあった。「熱河の兵匪討伐益々急にして、敵ハ天嶮の山中ニ逃込せるが、近く大會戦ある模様なり」[S8.2.28]。当時日本軍は、侵略に抵抗する中国軍を「匪賊」と呼び、その「討伐」を画した。弘安も、この時代の視線を共有した。「東京より避難民か来るのを見ニ出る人か、停車場前ニ充滿して居る・・・其中ニ『鮮人』(括弧は引用者)を引捕へたと、交番前ハ山のやうな人だ 殺してしまへと騒ぐ 多くのマッチを持って居て、貨車ニ隠れて来たとか噂して居た」[T12.9.4]。関東大震災後の金沢での出来事である。その朝鮮人は、関東での虐殺を逃れて貨車に乗ったのだろう。弘安は、人々が朝鮮人を殺せと騒ぐ様子をただ書いた(容認した)<sup>7)</sup>。「安藤師ノ演説 人ニハ半人ト滿人ガアル 半人トハ南洋諸島ノ蠻人及北海道ノアイヌノ如キモノ 滿人トハ文明的ノ人ヲ云フノデアアル 北海道アイヌハ今日食スル物ハ其日ニ求ムノデ獲物アレバ職ヲ排シテ有ル迄食シ、無ケレバ幾日モ食セヌ 文明ノ人ハ明日ノ事ハ今日考ヘ夏ノ事ハ冬考ヘ」[M45.2.15]。当時、(愚劣な)人種主義が蔓延っていた<sup>8)</sup>。弘安もその講話に共感した。

### 3 家郷

家郷とは、「わが家」(家族)を含む郷里をいう。天皇は国家を庇護し、国家は家郷を庇護し、家郷は家族を庇護する。家郷と家族は、幸福の両器であり、天皇も国家もそのためにある。国家の平和は家郷の平和であり、家郷の平和は家族の平和である。だから国家は戦争に負けられない。臣民はこのように思った。「昨年ハ国家にも私等個人にもよい年ではなかつた 本年ハよ

いやうにと神佛二念じ、雑煮を祝ふ」[T13.1.1]。昨年は、関東大震災の年であった。国家の苦難は私の苦難であった。「大正十年も又幸多からん事を祈れば同じ参拝の人続々と絶へず……今年も一家息災に幸あれかし」[T10.1.1]。一家息災が、弘安のすべてであった。弘安は、震災後、横須賀に住む親族の安否を案じた。そして半月後、「皆が無事で何より結構であった」[T12.9.16]と、安堵した<sup>9)</sup>。

家族の幸福は家郷の平和にあり、後者は国家の平和にある。平和の反対は戦争である。ゆえに戦争はない方がいい。あったとしても、戦場が外国であるかぎり、家郷は平和である。その平和を守るには、戦争に勝たなければならない。弘安は、家郷の平和を満喫した。「我家には、早朝起出で、若水を掬み、身を清して新年を祝へ、酒を酌み、雑煮を祝へ今朝来たる初刊の北國新聞を見る」[M39.1.1]。これは、日露戦争が終わった翌年の元旦である。「御大禮<sup>10)</sup>の當日ハ来りぬ 晴模様となる 町内ニハ旗提灯出で、甚だ美しい此三番丁始めての美観ならん 朝ハ短冊を釣り、提灯を掛る等の世話をする」[T4.11.10]。弘安は、提灯行列の準備に勤しんだ。「今後の戦争は商工業であるから實業家たる者禪をめて掛らねばならぬ 物價も漸次下落するであらう 我等も自己の及ぶ限り吾職業を發展させねばならぬ覚悟が必要だ」[T8.1.1]。第一次世界大戦が終り、仕事に頑張らなければならない。平和だからそれができる。次も、御大禮の日の様子である。そこに、町内での弘安の活躍と美しい家郷の風景が描かれた。「夜、浅の川方面の景氣を見ニ出た下堤町ハ赤白の幕を前ニ張り、三間明程ニ板金製の菊花直經一尺五寸計りのものニ中ハ電燈をつけてある 近江町ハ赤白幕ニ松のダシ、名古屋提灯を出し萬歳旗も出す 尾張町ハ軒下ニ上白、下青ニ白く菊桐鳳の模様を染抜ける張り、奉祝を書ける提灯を出す」[T4.11.11]。「子供を連れ太鼓行列ニ行つて呉れと頼まれ、羽織袴で辰巳君と出掛けた」[T4.11.17]。太鼓行列に羽織袴で参加する。弘安にとって、晴れがましい光景であった。その時、弘安は幸せであった。

## VIII 観念の顛末

### 1 揺らぎ

本稿は、職人弘安の『日記』をテキストに、観念(「天皇」「国家」「家郷」)の基盤・実践・編成について見た。そして、「国家」が「家郷」を庇護し、「天皇」が「国家」を庇護するという「観念の編成」を、「臣民の精神構造」の典型とみなした。弘安の「観念の編成」は、揺るがなかった。弘安は軍部に生きて、「軍隊と戦争」の出来事に生活の中で接し、行為した。その様子

は、「観念の基盤」「観念の実践」でみた。その経験が、「軍隊と戦争」を積極的に受容し、確たる「観念の編成」を育んだ。そこに、非軍都の市民の「観念の編成」を凌ぐ格別の強固さがあった。とはいえ現実には簡単ではなかった。「戦争中、市民は様々な形で戦争協力を強制された」[金沢市史編さん委員会、2006:156]。日露戦争は、市民に銃後の犠牲を強いる「『総力戦』のはじまりだった」(同)。金沢市は一万もの兵士を受け入れ、民家は兵舎となり、社寺は兵営となった。市民には増税が課され、戦時国債の購入、祝勝祝賀会への参加、貴金属の提供等が求められた。また戦死者の葬儀、軍人家族の救護、さらに兵士の送迎や提灯行列さえ半ば強制であった。そもそも戦争により多くの兵士が死んだ。その中には家族・親族等も含まれた。『日記』には、これらの市民の困苦や悲しみについての記述はない。軍都に住む弘安が、それらの困苦・悲しみと無縁だったとは思われない。とすれば、私的な日記においてさえ、戦争の不都合に触れることが憚れたのか。それとも、弘安には触れる必要がなかったのか。いずれにせよ、困苦や悲しみの記述がない事実は、弘安の信条の固さ、すなわち偏狭さを示している。

しかし、『日記』に弘安の精神構造の亀裂を読み取る手掛りは、いくつかある。ある日、弘安は、入営する友人を隊内に送った時、騎兵隊の兵士であった別の友人に会った。弘安はその日の『日記』に、友人は「大変つらそうであった」[T6.4.1]と書いた。しかし、そこに同情の言葉はなかった。また、それより前の日付であるが、弘安は、新兵の自殺が続いたことを書き、それについて「腑甲斐なし」[M41.2.2]と書いた。このような軍国の視線が、友人への同情を抑制したのだろうか。

弘安の政治信条は革新的であった。弘安は、藩閥政治に対して政党政治を、政友会に対して憲政会を支持した。弘安は、藩閥政治に反対して憲政擁護で騒擾を起こした、民衆の焼き討ち事件について書いた。「東京の新聞社の焼討は轉して電車の焼討となり、交番の打壊となる」[T2.2.11]。「國賊政治と生活難、閥族打破の根本とか云ふ題でやり出した 桂(太郎—引用者)公の攻撃、國民の困苦、議員の腐敗等をハツあたりに厳しく攻撃し通快であった」[T2.9.5]。また弘安は、「東北の凶作」[T2.11.22]、「金沢米騒動」[T7.8.12]について書いた。弘安は、「國民の困苦」を招く政治に批判的であった。そこには、困窮する弘安自身の生活実感もあっただろう。さらに弘安は、シベリア出兵の中で起きた尼港事件<sup>11)</sup>を批判した。「大要は此事件ハ現政府の失敗であるとて攻撃せり」[T9.6.26]。しかしこれらの批判が、国家への不信に及ぶことはなかった。戦争政策への批判に及ぶこともなかった。実際は、政府＝「国家」の政策として戦争があった。しかし弘安において、政府と国

家は峻別されていた。政府は政治家が携わるもの、国家は天皇が統べるものであった。前者は俗なるもの、後者は聖なるものであった。

## 2 臣民の悲劇

これには後日談がある。弘安は、戦争に関わる町内の世話に熱心であった。そして弘安は、1932(昭和7)年に金沢市から「満洲事變」出征軍人の遺族慰問金募集強力の感謝状を受けた。弘安は模範的な臣民であった。しかし他方で、一人息子の弘正が出征して、1944(昭和19)年にミャンマーで戦病死した。弘安は、そのことを知って仕事もできないほどに落ち込んだ。「(弘正の)戦死が分かってからほんとに黙り込んで、仕事しなかったんですよ。(仕事場に)座らなかった」(弘安の三女の話。2009年4月12日)。模範的な臣民であった弘安と息子の死に衝撃を受けた弘安。息子の死は、出征した時に覚悟したはずである。にもかかわらず、この心の間に何があったのか。ここに天皇を信じ、国家を信じ、戦争の勝利と家族の幸福を信じて、愛しい肉親を失った弘安の悲劇がある。国家は家庭の平和を奪った(戦争に勝っていても、事態は同じだろう)。悲劇を体験しないと分からない。「忠君愛国」の信条は、それほど深く弘安の精神を捉えた。これが、多くの臣民の運命であった。「軍隊と戦争」に日常的に接した軍都の臣民は、その精神の極致にあった<sup>12)</sup>。最後に、研究は、そのような臣民の心の闇にこそ切り込まなければならない。そこに人びとの葛藤があり、「観念の編成」が内部崩壊する仕掛けがあるのだから。戦後の「平和と民主主義」の外圧による「観念の編成」の封印ではなく。

### 注

- 1) 国民は、政治的な構築物である。その形成において、特定の人々が国民とされ、その他の人々が国民から排除される。そして、国民の多数者は民衆である。そのかぎりでは国民は民衆である。本稿の国民は、このような意味で用いる。
- 2) 筆者の『米澤弘安日記』への関わりの経緯は、[青木・近藤, 2018:序文]に詳しい。
- 3) これが絶対唯一の道であったという意味ではない。歴史に仮定の話は禁物ではあるが、欧米の帝国主義と闘いながらアジアの隣国と平等に共存する道はあったはずである。
- 4) マルクス＝エンゲルスは、現実的な共同利害(下部構造)の延長で国家の共同幻想を論じた。これに対して吉本は、対幻想・自己幻想との対比において共同幻想を論じた [吉本, 1982:25]。
- 5) 『金沢市史』によれば、「金沢の一般市民と軍隊との直接の接触は、・・・特別な場合を除いてごく限られていた」[金沢市史編さん委員会, 2006:169]とある。そうは思えない。市民の軍隊との接触は、日常的な光景であったと思われる。



- 6) 『日記』の引用は、記述された日付を [M39.1.20] のように表記する。明治39年1月20日の意味である。同じく大正をT、昭和をSと略記する。引用文中の( )は筆者の補足、□は解説不能、・・・は中略を表す。文は、誤字、脱字、差別的表現を含めて原文のままとする。
- 7) 「新聞を読み、そこから気になる記事や重要だと思われる記事を選択してとり上げ、日記に記述するという弘安の一連の行為は、記事の示す重要性を自らの内にとり込み、その重要性を自ら確認していくという行為であった」[坪田, 2009:88]。
- 8) 中国人や朝鮮人、先住民への蔑視や優越感、まさに明治以来の、本稿でいう精神構造(「観念の編成」)の産物である。
- 9) 親族の安否を心底案じながら、朝鮮人を殺せと騒いだ人々を黙認した弘安の心性に、戦場の兵士が、故郷の家族を気遣いながら、〈敵国〉人を、今日は何人殺したと自慢する手紙に書いた心性と同じものをみる [青木, 2011:14]。「観念の編成」は、かくも恐ろしい精神構造を生んだ。
- 10) 御大礼とは、天皇の即位の礼、それに続く大嘗祭を合わせていう。御大典ともいわれる。
- 11) 1920年に、アムール川河畔のニコライエフスクを占領する日本軍に反撃した、ソビエト赤軍バルチザンによる日本人兵士・民間人の殺害事件をいう。
- 12) 弘安の精神構造は臣民の一つの典型であった。もとより軍にも、そのような精神構造を持たない人々はいただろう。中には、天皇制国家を拒絶する人々もいただろう。「一つの」とは、そのような意味である。

## 文献

Althusser, Louise, 1995, *Sur la Reproduction: Idéologie et appareils idéologiques d'État*, Paris: Press Universitaires de France (=2005, 西川長夫・伊吹浩一・大中一弥・山家歩訳『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』平凡社.)

Anderson, Benedict, 1983=1991, *Imagined Communities: Reflection on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised Edition, London: Verso Editions, and NLB (=1997, 白石さや・白石隆訳『増補, 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版.)

青木秀男, 2008, 「殉国と投企——特攻隊員の必死の構造」特定非営利活動法人社会理論・動態研究所『理論と動態』1:72-90.

———, 2011, 「戦地に潰えた『東重共同体』——日本兵の感情構造」日本戦没学生記念会『わだつみのこえ』135:4-24.

青木秀男・近藤敏夫編著, 2018, 『金沢象嵌職人の生活世界——都市田中間層にみる〈民衆的近代〉』特定非営利活動法人社会理論・動態研究所監修, 大学教育出版.

Gramsci, Antonio, 1929-35, *Selezione di Gramsci*, Insituto Gramsci ed., Torino: Giulio Einaudi Editore, vol. 1-10, (=1947-60, 山崎功監修『グラムシ選集』合同出版社, 1-10巻.)

Gramsci, Antonio, 1975, *Quaderni del carcere*, Torino: Giulio Einaudi Editore (=1992, Prison

Notebooks, New York:Columbia University Press) .

Gramsci, Antonio, 1965, Lettere Dal Carcere, Torino:Giulio Einaudi editore (=1982, 大久保昭男・坂井信義訳『グラムシ獄中からの手紙——愛よ知よ永遠なれ Ⅲ巻』大月書店.)

橋本哲也・林有一, 1987, 『石川県の百年』, 山川出版社.

金沢市史編さん委員会, 2006, 『金沢市史』, 金沢市, 通史編3近代.

レーニン, 1917=57, 『国家と革命』(宇高基輔訳) 岩波書店.

マルクス=エンゲルス1845=46, 1956, 『ドイツ・イデオロギー』(古在由重訳) 岩波書店.

丸山眞男, 1951=95, 「日本におけるナショナリズム」, 『丸山眞男集』, 岩波書店, 5巻, 57-78.

松田博, 2003, 『グラムシ研究の新展開——グラムシ像刷新のために』 御茶の水書房.

坪田典子, 2009, 「帝国の形成と帝国意識——『米澤日記』を事例として」 文教大学国際学部, 『文教大学国際学部紀要』, 20巻1号, 85-97.

米澤弘安日記編纂委員会編, 『米澤弘安日記』, 上巻(2001), 中巻(2002), 下巻(2000), 別巻(2003), 金沢市教育委員会, 大学教育出版.

吉本隆明, 1982, 『改訂新版, 共同幻想論』, 角川書店.

(あおき・ひでお 社会理論・動態研究所)

本稿は、文部科学省の科学研究費助成事業の基盤研究C(2018年～2020年、整理番号19890002)の助成による研究成果の一部である。